

参議院常任委員会調査室・特別調査室

論題	視点「コロナ禍とコミュニケーション」
著者 / 所属	清野 和彦 / 国土交通委員会調査室
雑誌名 / ISSN	立法と調査 / 0915-1338
編集・発行	参議院事務局企画調整室
通号	453号
刊行日	2023-2-8
頁	2
URL	https://www.sangiin.go.jp/japanese/annai/chousa/rip_pou_chousa/backnumber/20230208.html

※ 本文中の意見にわたる部分は、執筆者個人の見解です。

※ 本稿を転載する場合には、事前に参議院事務局企画調整室までご連絡ください (TEL 03-3581-3111 (内線 75013) / 03-5521-7686 (直通))。

コロナ禍とコミュニケーション

国土交通委員会 専門員

せいの かずひこ
清野 和彦

コロナ禍で、人が集まる機会は忌避されてきた。この間、シンポジウムなどの学びの機会も、専らウェビナーなどの形で催されてきた。モニター越しの「参加」はテレビ番組の視聴と大差ない。来場している面々の観察といった楽しみもなく、味気ないものだ。

そう思っていたところ、久しぶりにリアル開催されたシンポジウムへの参加を果たすことができた。筆者の興味を特に引いた部分をいくつか挙げてみたい。

講演者の一人、中央大学大学院戦略経営研究科の遠山亮子教授からは「Withコロナ時代において知識創造の「場」はどう変わるか」。対面でもデジタル・コミュニケーションでも、どちらもアレン曲線（＝物理的距離とコミュニケーションの頻度との間には負の相関関係があることを明らかにする）に従うことや、物理的に同じオフィスで働くエンジニアは、別々の場所で働くエンジニアと比べて、デジタル・ツールでも連絡を取り合う確率が20%高かったという研究*が紹介された。一方で、対面とオンラインでの会話の質的差異についての研究によれば、相手との間で信頼関係が既に構築されている場合には、個人的で他者と共有しにくい情報は、場が作り出す文脈に拘束される対面での会話よりも、オンラインの方が話しやすいのだという**。つまり、コロナ禍以前にある程度の信頼関係が構築できていたならばオンラインでもよいが、その場合、新採用者のように新たに入ってきたメンバーと如何にして信頼関係の構築を図るかが課題となるということだった。

さて、私たちの職場の現状はどうか。コロナ禍の真っ只中に採用され、調査室に配属された職員は、所属室が違えば顔と名前が一致しないと言う。廊下で同じフロアで勤務する同世代とすれ違っても、同じエレベーターに乗っても、「この人、誰？」というのが実態のようだ。また、仮に顔と名前が一致したところで、その人がどんな人かはよくわからない。採用以来、一度も同じ職場の先輩職員と「乾杯」したことがないという話も耳にする。

そんな中、先日、職場での「この人、誰？」問題を乗り越えようと、調査室の若手職員を中心に、ごく短時間ではあるが、参集し簡単な自己紹介をして交流する会が催された。自分の担任する分野を他者に説明するのは初めてという者も多かっただろうが、わかりやすく、丁寧に、クスッと笑えるエピソードを交えたりしながら、しっかりと話す姿に、頬が緩んだ。こういった取組が、職場における信頼関係構築への足掛かりとなればよいと思う。

*ベン・ウェイバーほか「オフィスはコミュニケーションの手段 仕事場の価値は多様な出会いにある」『DIAMONDハーバード・ビジネス・レビュー2015年3月号』

**田中彰吾・森直久「間身体性から見た対面とオンラインの会話の質的差異」『こころの科学とエピステモロジー第4号 vol. 4, 2022』